

# 市長室：対話の記録

## 要旨

## 開催内容の公開

市長あいさつ

中島事務局長あいさつ

自己紹介

CAP あさひかわの概要  
(活動状況など)

子どもをとりまく地域環境

大切な3つの権利「安心・自信・自由」

保護者や先生、地域の大人が理解することが必要

すべての小中学校の児童・生徒がCAPのワークショップを受けられるようになるために①

CAPのワークショップの内容

すべての小中学校の児童・生徒がCAPのワークショップを受けられるようになるために②

CAP あさひかわの会員を増やすことについて

すべての小中学校の児童・生徒がCAPのワークショップを受けられるようになるために③

市長終わりのあいさつ

第53回目となる今回は、「CAP」(子どもが暴力から自分を守るための人権擁護プログラム)を実践する専門家が小学生、保護者及び教職員を対象にワークショップを開き、子どもたち自身に問題を解決できる力をつけてもらうことを目的として活動している「CAPあさひかわ」の皆さんと、日ごろの活動状況や今後の課題、市への提言などについて対話、意見交換を行いました。



日時	平成23年1月18日(火) 午前10時00分～午前11時30分
場所	秘書課 第1応接室(旭川市役所総合庁舎2階)
相手団体	CAP あさひかわ
出席者	旭川市長 西川将人 「CAP あさひかわ」(敬称略) 中島智子(事務局長) 山越久美子 江口いづみ 鈴木めぐみ 越智雅代

## 対話の内容

(参加者から寄せられた意見と、市長のコメントについてまとめたものを掲載します)

市長あいさつ

おはようございます。

皆さんも1月はたいへんお忙しい時期かとは思いますが、今日はこのような機会をつくらせていただきましてありがとうございます。

私は団体としてのCAPの皆さんとお会いするのは初めてなのですが、平成18

年に前市長と意見交換をされていたと聞いております。

子どもたちを虐待などから守るため、私たち行政や社会ができることはいろいろあると思いますが、皆さんの活動の趣旨が、子ども自らがそういったものから身を守ったり、またそういったものに負けない強い子どもにしていくという、そのような子どもを育てるということに主眼をおいて、次世代を担う子どもたちの成長のためにたいへんなお力添えをいただいているということであり、たいへんすばらしい活動だなと敬意を表します。

今日はぜひそういった活動を私自身も理解させていただいて、担当部局の職員も同席しておりますが、改めて私たち行政も受け止めて、地域の子どもたちと一緒に守っていくために、ぜひ役立たせていきたいという思いで、こういう機会を設けさせていただきました。

皆さま方もご承知のように、「子ども110番の家」や「子ども110番の車」などの取組のほか、地域におけるスクールガード・リーダー、登下校の見守り活動など、ボランティアの方々にお世話になって、子どもたちを守るのための取組を進めてきておりますけれども、引き続きいろいろな取組を展開していくことができればと思っていますので、今日はぜひともいろいろと貴重なご意見をいただきたいと思えます。よろしく願いいたします。

#### 中島事務局長あいさつ

皆さん、おはようございます。

今回はこのように私たちをよんでいただきまして、ありがとうございます。

市長は、2期目の公約の中にも子育て支援について掲げられておりますので、今日私たちがここにいることも、そこに関連することなのかなと思っています。今日は皆それぞれの立場で意見を持ってきましたので、聞いていただけたらと思います。よろしく願いいたします。

まず、市長はこれまでもいろいろな団体の方々との対話集会をされているようですが、今回、この対話集会にCAPあさひかわをおよびになった理由などについてお尋ねしたいと思います。

※以下、「CAP あさひかわ」の皆様については敬称を省略しています。

#### 市長

私は、1期目の間も子育て支援については、市の重点施策として頑張ってきました。市の中に子育て支援部という部署を新たに設置して、いろいろな取組を進めてきています。2期目についても、引き続き市の最重要課題という位置付けで取り組んでいきたいということで、それに関連する様々な公約を提案し、一歩ずつ確実に実現に向けて取り組んでいきたいと考えています。

特に最近、地域の絆がどんどん細くなってきていて、隣の家で子どもが虐待されていてもわからないという状況の中、そのような子どもをどう救っていくのかということがたいへん重要な課題です。これは子どもだけではなく、女性や高齢者などについても同じ状況であり、この問題はどんどん深刻化してきているのではないかと危惧しています。

子どもたちには無限の可能性が 있습니다。その無限の可能性を持つ子どもたちの芽を摘んでしまうような家庭環境や社会状況をなくしていかなければならないと

いう思いで、今日はCAPの皆さま方とのこのような機会をつくらせていただき、本当に楽しみにしていました。よろしくお願いいたします。

## 自己紹介

### 中島

では、改めてCAPの活動についての説明などをさせていただきたいと思います。今日は代表が所用で来られませんが、普段活動している者が参加することができましたので、まずは一人一人自己紹介をさせていただきます。

### 山越

学校側との窓口を担当しています山越と申します。よろしくお願いいたします。

### 江口

会計を担当しています江口と申します。よろしくお願いいたします。

### 鈴木

鈴木と申します。よろしくお願いいたします。

### 越智

私は越智といいます。よろしくお願いいたします。

### 中島

鈴木さんと越智さんは、実は赤平市に在住の方です。以前、赤平市の小学校で、CAPあさひかわでワークショップを開催したことがありました。その時に参加してくださった保護者の方で、CAPの活動に共感して自分たちも活動したいということで、赤平市に立ち上げた子どものためのグループがあります。

### 越智

それが、植松努さんが立ち上げた「子どもの輝きを支える会」です。彼と私と鈴木さんの3人で、CAPスペシャリストの資格を取り、赤平市で子どもたちにプレゼントをしたいということで、CAPと同じ活動趣旨である「子どもの輝きを支える会」の中で、一緒に活動させてもらっています。

## CAP あさひかわの概要(活動状況など)

### 中島

旭川の学校でワークショップがある時には、赤平市から来ていただいています。赤平市には5つの小学校があるのですが、今年度もすべて入ることができました。また今は中学校での実施も検討していただいています。

CAPあさひかわは、1997年に準備会を立ち上げ、1998年に設立、活動を始め

ました。今年で12年が経ちます。当初は認知度が低かったということもあり、活動実績も少なかったのですが、徐々によんでいただける回数も増え、2001年から2009年までの間で、子どもは10,799人、大人は5,009人の方にCAPのワークショップを聞いていただくことができました。しかし、まだ旭川市内の小学校の約35%しか入れていません。愛別、当麻、東神楽町などの近隣市町村の学校からはよくよんでいただいています。旭川市内の小学校で、今まで一度もよんでいただけていないところもありますから、そういうところに入りたいというのが私たちの希望です。

CAPの活動は、基本的人権、人権教育プログラムの分野の活動です。しかし、学校によっては防犯教室というくりで、防犯の一環としてワークショップをしてくださいというようなかたちでよばれることが多いです。私たちとしてはとにかくよんでいただかないと始まらないので、防犯の一環としてでも行かせていただいております。

また、CAPプログラムは子どもだけにしているというものではありません。子どもは一人では生活できませんから必ず家庭に帰ります。家庭には保護者が、大人の方が必ずいますから、その大人の方にCAPの考え方というのを理解していただき、まず子どもを見守っていただくことが大事です。

それから家庭は最低限のユニットで、地域に所属しています。学校も地域に所属しています。今、学校で取り組んでいる、家庭、学校、地域というトライアングルの形をうまく具合に持っていくためには、地域にもCAPの考え方を発信し続ける必要があります。その地域に所属している私たちのようなおばさん、おじさんがグループをつくって、学校に入って行って、みんなにはこういう権利があるんだよということを伝えることは、非常に大事なことだと思います。先生方が教えてくださる以外の、開かれた学校にも少し触れていきますが、外に住んでいる、地域の一人である私たちが学校に出掛けて行って話をすることは、非常に重要だと思っています。

## 市長

習い事や部活動をしていれば別ですが、なかなか子どもたちは、親と学校の先生以外の大人と話をする機会は少ないかもしれませんね。

## 子どもたちをとりまく地域環境

### 中島

昔は、知らない人には親切にきなさいとか、あいさつを積極的にきなさいとか言われて育ちましたが、今は、知らない人には気を付けなさいと言われていた世代で、それはそういう悪い実績があるからだと思います。先日の新聞に、声かけ事案というのが昨年度よりも50件くらい増えているという記事が載っていました。連れ去られはしなかったけれども、声はかけられるというのが、やはりいつまでもあるんですよね。それは、子どもにとってはとても怖い事です。そういう怖いことや嫌なことをどうしたらなくすことができるかではなくて、そういうことに遭った時に自分で対処できる力は皆が持っているものなんだということに気付かせてあげて、そしてその力

を増やせるように、周りの大人や先生方の働きかけで、その力は増やすことができるということを伝えていきたいということで活動しています。

### 市長

私たちが小さい頃からそういう事案はありました。  
旭川市内でも、毎日のように小学生が声かけられたとか、手を引っ張られたとか、そういう情報がインターネットを経由して入ってきます。

### 越智

子どもは弱いもので守らなければいけないと思いがちですが、本来子どもは自分を守る力を持っているので、自分でアンテナをめぐらせて、この人、変だって感じて、そこから逃げるとか、いやだって言ったり、相談したり、大人が守るだけではなくて、子どもには自分の権利を守る力があり、自分で自分のことを守る、友達のことも守ってあげることもできるという力を身に付けることが、すごく大切なことだと思います。

### 市長

アメ玉くれたりだとか、このおじさんについて行ったら何か楽しいことがあるんじゃないだろうかとか、そういう好奇心でついて行ったりする場合も結構あると思いますね。

### 中島

例えば誰かに「チョコをあげる。アメをあげる」と言われてもついて行ってはいけないんだよって家の人に言われていると子どもたちは言います。低学年だけでなく、高学年の子どもも言います。だから未だに物をあげるからおいで、という稚拙な方法ですが、それは生きていて、子どもはそれにだまされてしまうのです。

今は昔と環境が全然違っていて、隣の人のことはわからない、知らない、あまり声をかけるとお節介になるような、そういう風潮になっていますよね。昔は、お味噌貸して、お醤油貸してっていうような近所付き合いがあったと思いますが、今は隣に誰がいて、同じ小学校に通っているはずなのに、どこのクラスなのかもわからないというような、そういった疎遠な状態です。それが子どもたちの間にも生じており、そこが協力体制のネックとなっているなど、ワークショップに行くと感じるところです。

### 山越

地域というものがやはり崩れてきていると思います。ある小学校に行った時に聞いたお話ですが、町内会として子どもを見守ってほしいということを、校長先生が町内会にお願いしたところ、ほとんどの親御さんが町内会に入ってくれていないのに、なぜ町内会として、子どもを守らなければならないんだと、会長さんから言われ困りましたと校長先生が話していました。親御さん自身の意識の問題もあるでしょうし、本当にそういうかたちで地域が崩れてきているというのを感じています。私たち自身が、やってもらうだけでなく、自分が何かしようというふうを考えていかなければいけないということを、大人の人には伝えたいし、そういう環境の中で子どもを

育てていきたいと思っています。

## 大切な3つの権利「安心・自信・自由」

### 中島

子どもたちには、「安心して・自信を持って・自由に生きる」という3つの大切な権利があるんだよということを、わかりやすくビジュアルボードを使って、また身体を動かしながら覚えてもらいます。大人の方にお訊きするのですが、「安心」するってどういうことなのでしょう。それを説明できるでしょうか。「安心」、「自信」、「自由」って言葉で聞いてわかったような気になるのですが、「安心」とは本当はどういうことなのでしょう。子どもにどういうことって訊かれた時に、的確に答えることができるかということがあるので、大人の人に「安心」とはどういうことなのか訊いてみるのですが、皆すぐには答えられせん。子どもたちにも、にっこりとしたお顔になれる時は誰と一緒にいる時？どんな場所にいる時？と具体的に訊くのですが、ありがたいことに、お父さん、お母さん、お家の人、家族の名前が先に出てきます。どんな場所かについては、やはり家というのが出てきますし、他には大きな木の下とか、学校、広い場所、高学年になるにつれて、一人になれる場所になり、布団の中、トイレ、お風呂の中という子もいます。



「自信」についても、ぐっと力が出るような、自信を持つ時ってどういう時？と訊くと、やはり達成した時、成功した時、何かが出来た時という答えが非常に多いです。ただ非常に危惧しているのが、低学年ではなかなかそれが出てこないことです。もちろん6歳、7歳では経験値が低いですから、褒められるという体験が少ないのかなと思いますが、ここ何年間かの多くの小学1年生に共通していることです。ですから、あまり褒めると天狗になってしまうとか、わがままになってしまうとか、そう思うかもしれませんが、褒めて損をすることはありません。できたね、すごいね、やれたね、と言うのは、子どもの自信につながっていき、またさらにやっついこうということになると思いますので、褒め惜しみをしないでほしいと思います。

最後に「自由に生きる」ということですが、わがままや自分勝手と混同してしまうような危惧があるのですが、「自由」というのは選べるという状況のことなのです。自分で選ぶことができるということです。それから、どんな小さな子でも自分で選んだら責任を持つんですよね。大人は権利と義務をセットにして考えがちなのですが、ここでいう基本的人権、生存権というのは、義務が伴わない、誰でもが持っている、誰にも侵されないものであるということが基本になっていますので、この「安心して・自信を持って・自由に生きる」というのは、誰でも持っていること、どんな子どもにもあるということ、まず子どもたちに伝えていくということなのです。



## 山越

いじめっ子、いじめられっ子というロールプレイ(寸劇)も見せるのですが、いじめっ子にも、この「安心・自信・自由」という権利はあるんだよと言っています。悪い子だから、それが無いということではなくて、どんな子でもあると言っています。

## 中島

良い子だから持っているのではなくて、悪い子にもある権利なのです。もしも悪い子や嫌な子がいたとして、皆がその子を遠ざけたり、排除したり、無視したり、いわゆるクラスの中のいじめにつながるようなことをしたとしたら、その子は安心できるだろうか、毎日楽しく学校に来られるだろうか、どんな立場の子でも、誰にもある、誰にも侵されない権利ということです。

もし、それを侵されそうになった時には、こういう方法があるよと提示するのですが、「いやだ」と言いなさいではなくて、「いやだ」と言うこともできる、これも選択です。中には「いやだ」と言えないお子さんもいますから、そういう子の場合には練習をします。お母さんやお家の人相手が相手になって練習をしてもらいます。「いやだ」と言えるようになったら、その子は気持ちが強くなるので、乗り越えることができるという例もたくさんあります。あの子が嫌な事をするから学校には行きたくない、そこで、止めてちょうだい、そんな事は「いやだ」と言ったからといって、その被害がなくなるわけではありませんが、私は「いやだ」と言えたんだという自信がつきます。それが次の段階にその子を進ませることができるので、この「いやだ」と言ってもいいよという選択肢は非常に重要な方法のひとつです。

もうひとつは、誰だって嫌な事や怖い事が起きている場所には行きたくないの、逃げてもいいんだよということです。「にげる」というのは一つの表現方法なのですが、近づかない、行かない、避けるということです。そういうふうに逃げてもいいよということです。

最後に、一番大事なのは「話す」ことです。これは相談するんだよというふうに言いますけれども、子どもにとって自分が被害を受けているということは、恥ずかしいことで、親には言えないのです。なぜかというと、親が心配するからです。親に心配をかけたくないために一人で我慢しているという状態が非常に多いです。だけどそれは自分の我慢が限界になると、手首を切ったりなどということになってしまいますので、早いうちに困っていることを誰かに「話す」ことです。これは相談であって、言いつけたり、チクルということとは明らか違うんだよというように、「話す」ことの重要性を伝えるようにしています。

ですから、「安心・自信・自由」と「いやだ・にげる・話す」を子どもたちに覚えてもらいたいと思います。これはアメリカから来た考え方なので、「いやだ・にげる・話す」の基本は「NO!・GO!・TELL! (ノー・ゴー・テル)」となっていて、また、「安心・自信・自由」は、「SAFE・STRONG・FREE(セーフ・ストロング・フリー)」となるのですが、STRONG(ストロング)という、強いという概念は日本ではな



かなか通用しにくいので、「安心・自信・自由」というふう置き換えて使わせてもらっているのですが、そういうことでいろいろなスキルを子どもたちに伝えています。

CAPはハウ・ツーものではありません。例えばハウ・ツーもの場合は、こうなったらこうすると、千差万別で何百通り、何万通りにもなってしまいますので、それに合致しない場合、マニュアルにないことは、自分で選り取れなくなってしまいます。CAPはそういうハウ・ツーを教えるのではなく、自分の頭で危険を回避することを考える、それを子どもに伝えるためには、私たちのような周りにいる大人も、子どもにできるよと、そういう力があるよと、やれなかったら練習しよう、やってみよう、できたねという、そういう関わり方が必要なんだろうと思っています。

## 市長

もちろん子ども自身がそういうお話を聞かなければいけないですが、家庭にいる時間が一番多いですから、親もそういう意識を持って家庭で子どもと接することは大切だと思います。

## 江口

「話す」ということがとても大事なことだと思います。子どもたちはクラス単位でワークショップをし、保護者にもワークショップをしますが、最近、残念なのは、親御さんたちの出席がすごく少ないことです。お仕事をしている方もたくさんいますので、時間的にとても難しいとは思いますが、子どもが大人に話した時に、大人がどうやって聞いたらいいか理解していなければなりませんので、ぜひ受けてほしいと思います。

ワークショップの後に、必ず子どもたちとトークタイムといって、相談や質問など、一人ずつ私たちと話をする時間を持ちます。その時にいろいろな子どもたちが来て、ワークについての感想など、たわいのないことを話すことが多いのですが、中には以前にあった嫌な事や、ちょっと怖い事を私たちに話してくれることがあります。今まで誰にも話せなくて、心の中に留めて重い気持ちだったのが、初めて会った私たちに話してくれるのです。よく話してくれたね、話してくれてありがとうと私たちはその子に言います。子どもはすごくほっとして、今まで話せなかったんだけど、こうやって大人に話して聞いてもらえるんだって、そうするとすごく安心した気持ちになれるということを知ってもらえるんですね。もし今度またそういうことがあった時には話せそうな気がするって言ってくれます。そこで必ず、誰に話せるの？と子どもたちに訊くのですが、お父さん、お母さん、先生、先生も具体的に名前を挙げて、答えてもらいます。そして今度話そうと思った時は、今、たくさん挙げた名前の中から、この人に話すことができるんだということを心に留めておいてもらうと、それだけで子どもたちは安心した気持ちになるって言ってくれます。私たちとはたった1時間しか一緒にいませんが、話すことができたという子どもに、自信や安心の気持ちを持ってもらって本当に良かったなという経験は何回もあります。

ワークショップの後に、子どもたちにアンケートをとっていますが、そこには子どもの生の声を書いてあり、「子どもにも権利があるということがわかった」とか、「今度は困っている友達を助けてあげたい」とか書いてくれるので、本当に良かったと思いますし、一人でも多くの子どもたちにCAPを知ってほしいと思っています。



## 保護者や先生、地域の大人が理解することが必要

### 越智

子どもだけではなく、家庭や地域、先生など皆が理解していないと、せっかく子どもがサインを出していても、それを見逃してしまいます。保護者ワークショップを受けたお母さんたちは、子どもとどのように接したらいいか悩みを抱えている方もいますので、来てよかったと言ってくれます。ワークショップでは子どもから話された時に、親は何をすればいいかということを理解してもらおうのですが、まず、「話してくれてどうもありがとう」と子どもに言うことです。「あんたが悪いんだよ」とかではなくて、「私は信じるよ。一緒にどんなことができるか話し合ってみよう」と言うことです。CAPは親が解決することではなく、子どもが本来持っている力を引き出すプログラムなので、じゃあ何ができる？と一緒に考えて、これだったらできるかなということ、まず子どもを全面的に受け入れて、「話してくれてありがとう。何だったらできる？」というように、一緒に解決方法を考えるものなので、保護者ワークショップが子どもとセットになっているのです。来てくれたお母さん方からすると、本当に目からウロコといった感じです。子どもが話したことを全部受け止めてあげて、じゃあ何ができるかな？一緒に考えようっていう、それがこのプログラムの良いところだと思います。

### 鈴木

私たちも最初は保護者の一人でした。子どもとの接し方にすごく不安があった時に、話を聞いてこれだって思いました。そして他の保護者、親がこういう目で子どもたちを見ていけば、子どもたちも安心して生きていける社会になるんだなと思い、実際に自分がやってみようと、CAPあさひかわの方に相談に行ったのです。

必ず大人ワークと子どもワークはセットで受けなければならないことになっています。それを学校側に提示するのですが、学校もカリキュラムや時間割などの問題があり、なかなか入れてもらえない状況です。道徳や総合学習の時間などを利用して、何とか工面していただける学校もありますが、なかなか難しい状況です。

### 市長

学校の方も余裕がないということですね。既存のカリキュラムの中にどう入れ込んでいくかという問題があるのですね。

### 鈴木

先生たちと私たちとがうまくコミュニケーションがとれて、理解していただき、そして学校に入らせていただくということは、とてもそう簡単にいくものではありません。地域も家庭も学校も皆がひとつになって、社会全体が子どもを何とかしていこうという流れになると、私たちも学校の方に話しやすくなります。そのために少しでもこのCAPの知名度が上がって、理解してもらえるようになってほしいと思います。

すべての小中学校の児童・生徒がCAPのワークショップを受けることができるよう

## になるために①

### 越智

赤平市内のすべての小学校に入ることができたのは、植松さんがプレゼントというかたちで、無料でいいから入らせてほしい、時間だけもらえればいいのというこ  
とで始めたからなのです。まずは知ってもらわなければ、その良さもわかりませ  
ん。今受けた子どもたちが大人になった時に、その良さがわかってくれるでしょう  
し、植松さんは企業の中の従業員たちに受けてもらうなど、いろいろなことを考え  
て、その良さを知ってもらうようにしています。旭川市ではまだ全部の小学校に入  
れてはいませんし、なかなか自分たちでお金を払ってまで聞こうっていうところまで  
はいきません。いろいろとたいへんな面はありますが、少しずつでも進めていきたく  
いと思っています。

### 市長

すべてボランティアで行うというのは難しいでしょうね。

### 中島

CAPというのは、有償ボランティアで、ある程度お金がかかります。やはりそこが  
ネックになっていますが、今回、北海道新聞社会福祉振興基金をいただくことがで  
きました。

### 山越

今年度、北海道新聞社会福祉振興基金を30万円いただくことができました。そ  
れと私たちが貯めていたお金と合わせて40万円を資金として、まず、CAP自体を  
市民の方にわかっていただくこと、上川教育局の方ともタイアップして、市民活動  
交流センターCoCoDe(ココデ)で講演会を開催しました。

### 山越

講演会では先生方や市民の方に来ていただいて、まずCAPを知っていただきま  
した。会場代やポスター、チラシ代などで20万円くらいかかったのですが、残りの  
20万円を使って、東町小学校、神楽岡小学校、豊岡小学校のそれぞれ2年生と5  
年生にCAPを無料で提供させていただきました。

### 市長

ワークショップに使う教材も1部500円くらいするんですよ。

### 江口

教材代というよりは、ワークショップ料金が全国一律となっています。  
私がCAPに入った当時はボランティアなので、資料代としての100円で始めまし  
たが、今はもうCAPも全国規模となり、料金体系も一律になりましたので、それに  
合わせなければなりません。

### 市長

全国組織に入っているんですね。

### 中島

インターナショナル・キャップ, I/CAP(アイ・キャップ)という本部がアメリカにあります。世界中にCAPはありますから、日本もその一部門ということになります。日本では、規模の大小はありますが、全国で190のグループがあり、地図上で関西を中心にしたい2分割されて、私たちは札幌の本部に所属しています。もう一つは西宮の方にあるのですが、そのどちらかの本部にグループは所属していません。

### 市長

道内はいくつのグループがあるのですか。

### 中島

道内は9つのグループがあります。今は47都道府県すべてにグループができました。しかし、人口比が様々ですから、ひとつの地区に3つも4つものグループがあるところと、1つしかないというところがあったりします。北海道は大きく1つで、そこに9つあり、一見たくさんあるように思えますが、北の方にグループがないんです。そこをカバーできるのはCAPあさひかわということになるのですが、日帰りで稚内は厳しい状況です。士別市は通常行っていますし、留萌市、名寄市も何とか行っていますが、豊富町や湧別町などはお断りしたことがありました。私たちも子どもがおり、だんだん大きくなってきたので、留守にしてもそこそこ大丈夫なようにはなってきたのですが、子どもが幼稚園の時から始めてますから、その頃はあまり留守はできない状況でした。ですから、保護者ワークで感銘を受けたところでグループを立ち上げてくださいというような種を蒔いていきたいと、北海道の9グループは皆思っていると思います。

あとはお金の問題です。無料ではなく、1ワークショップいくらということでお金がかかります。愛別町や留萌市などは、教育委員会の方で予算をつけていただいております。そこで、旭川市内の全小学校でCAPのワークショップを行った場合、いくらかかるのか、シミュレーションをしてみました。旭川地区は中央ブロックや東部ブロックなど、8ブロックあります。1学級、30人学級として、1学校に2年生と5年生、2クラスずつというように定義してシミュレーションをしてみました。複式校や30人いない学校、2クラスない学校もありますから、それを全部ならして、ブロック単位でこのくらいかかりますというものです。すべての小学校を1年間で行ったとして、保護者も教職員も入れると、だいたい370万円くらいあれば、全学校に1年間に入れるということになります。しかし、私たちの稼働率を考えると、それが可能かどうか、難しいかもしれません。

### 市長

今、会員さんは何名くらいいらっしゃるのですか。

### 中島

CAPあさひかわの会員は12名います。普段、フルタイムで働いているもおりま

すし、パートや非常勤で働いている者もいます。3人一組で行きますので、それをやり繰りするのがたいへんで、依頼を受けても、なかなかすぐに行けますとお返事できないという悩みもあります。

#### 江口

小学校は、2クラスを1日で行うことができます。

#### 中島

午前と午後を使えば1日で1学年は終わることができます。

#### 江口

最低、1つの学校に、2年生2回を1日、5年生2回を1日、教職員、大人で1日と、合計3日間の日程で行います。

#### 市長

1校につき3日間ということだと、55校あると150日以上になりますね。

#### 中島

これまで一番多く行った年で79回ですから、1年間ですべては難しいかもしれません。

#### 市長

今までは費用はどうしていたのですか。

#### 中島

学校にお願いしていたので、PTAの会計から出していただいたり、家庭にお知らせして、子どもたちに500円持たせてもらったりしています。当麻町では、子どもたちが500円を持って学校に来るようになって、もう5年くらいになります。

#### 市長

学校の数が少ないとまとまりやすいでしょうね。50校以上もあると難しいかもしれませんね。

#### 中島

そこが非常に難しいところだと思います。

ただ、教職員のワークショップをすると、「こういうものがあつたんですね、教頭会や校長会でCAPについて話してみます」と言ってくださる管理職の先生もいますし、「皆に周知してよんだらいいですね」と言ってくださる先生もいるのですが、学校ではいろいろと行事も決まっていますので、そこに入り込むのは難しい状況です。

#### 市長

昔のように、土曜日でも学校に行くようになると余裕ができるのかな。

**中島**

以前、土曜日などの学校の休みを利用してはどうかということもあったのですが、その場合、自由登校になるので学校は責任持てませんと言われました。そうすると、自由参加になってしまうので、受ける子と受けない子が出ることになり、ワークショップができなくなります。ワークショップは、クラス単位で担任の先生にも参加していただくことが鉄則となっています。

**市長**

今度また教科書が厚くなるんですよね。授業数は増やさないんですか。土曜日は休みのままなのですか。

**中島**

授業数は増えます。土曜日はそのままです。

**市長**

それではますます時間がなくなりますね。学芸会の練習もできなくなりますね。

**中島**

子どもたちはもっと忙しくなるんじゃないかと思います。

**市長**

国が決めることですが、そこまでして土曜日を休みにしなければいけないのかな。

**鈴木**

赤平市の中学校は終業式の日も給食が出て、午後に授業をしています。

**越智**

そうしないと学校祭などの他の行事予定をこなせないんですよね。

**中島**

始業式にも教科書持っていきますね。

**市長**

新しい学習指導要領が実施されるのはいつからでしたか。

**教育指導課主幹**

小学校の全面実施が平成 23 年度、来年からです。中学校は 24 年度からです。

**市長**

そうすると、来年度から小学生は今までより忙しくなるのですか。

### 教育指導課主幹

低学年で週2時間くらい増えます。今まで4時間授業だった日が、5時間授業になるということです。中学校の方は1時間増えることとなりますので、5時間の日が1日で、あとはすべて6時間となります。

### 市長

週2時間増えたらたいへんですね。帰る時間が遅くなるんですね。

### 越智

昔は低学年は学校に行ったら、昼前には帰ってきましたが、今は1年生でも遅いですからね。

### 山越

愛知県の方でCAPをやっている人の話では、向こうは行政が予算をつけているそうです。でも、一年間にすべての学校に入ることができないので、何年間に分けてやっているそうです。

### 中島

留萌市は教育委員会から毎年打診が来ます。留萌市は5つ小学校があるのですが、夜だったりと時間帯が厳しいので、時々、札幌のグループにお願いしたりしています。このようなネットワーク化も私たちの課題です。北海道は広いので、9つもグループがあるといても、お互いに共有できるような距離ではありません。

### 市長

ワークショップ1回あたりの時間はどれくらいですか。

### 中島

小学生は1コマ60分間です。授業がだいたい45分間なので、途中でチャイムが鳴って、せっかく集中しているのが削がれたりという恐れもあるので、特別教室や多目的教室などの普段勉強する教室ではないところを提供してもらっています。

### 鈴木

大抵の学校は1, 2時間目や、3, 4時間目というように2コマもらわないと間に合わないかなと思います。

### 市長

45分間に短縮できないのですか。

### 越智

できません。この時間も全国统一されて決まっているものなのです。それは例えば私たちがどこに行っても、同じものができるということなのです。

## CAP のワークショップの内容

### 中島

60 分間のワークショップの内容はおおよそ3つに分けられます。

1つ目は権利の話です。権利というものについて理解してもらいます。それに 10 分から 15 分かかります。話してばかりだと、子どもは飽きてしまいますので、2つ目は体験学習的な、見てもらって、実際にやってもらって、意見を出してもらおうという簡単なロールプレイを行いながら、どうだった今の？というやりとりをします。最後には、実際に相談したら、どういうことになるのかやってみようということで、担任の先生に出てきていただいて、相談を受けた時の有効なコミュニケーションのとり方を担任の先生にも体験していただくというスタイルになっています。

今日は、実際に使っている人形を3体持ってきています。この他におばあちゃんと誘拐犯の男の人の人形があります。誘拐のロールプレイというのがあり、3年生以上は人形は使わずに私たちがやりますが、怖い思いはさせないというのがCAPの基本ですから、1、2年生にはこういう人形を使った人形劇をします。この人形が実際にセリフを言って、動くわけですから、子どもたちもすごく感情移入して、「そこにいっちゃだめ」とか、「もっと離れて」とか、「あの人のはだめ」とか声を出します。低学年向けには非常によくつくられたものだと思います。

1年生が60分間もワークショップを受けていることは非常にたいへんなことです。でも途中でトイレ休憩を入れたり、こういう人形劇を入れたりして、興味をひいて非常に記憶に残るようになっていきます。リピーターの学校では、2年生で受けた子が今度は5年生で受けることになり、2年間の開きがあるのですが、途中で、「それ知ってる」とか、「もしかしてこうじゃない」とか記憶を喚起されて、途中で思い出すんですね。もし知らない人に声を掛けられた時はどうするんだったかな



と訊くと、「近づかない」とか、「腕2本分離れる」とか出てくるので、以前受けたワークショップを覚えていて、必要な知識が身につけていてくれるんだと思います。

中学生にもなってくると、自我も芽生えて、相談できる相手も親ではなくて、友達関係だったりするのですが、その友達関係がうまくいかないと、引きこもってしまったり、不登校につながってしまったりということもあります。また、今、DV(ドメスティック・バイオレンス)や、子どもへの虐待が非常に増えており、児童相談所だけではなく、市の子育て支援部でもこういった相談を受ける体制になっています。平成16年の児童虐待防止法の改正により、子どもに直接の虐待がなくても、子どもの同居する家庭におけるDVも心理的虐待に当たると定義され、そのような家庭に育つ子どもをいかに救っていくかという部分も、このCAPのプログラムの中には入っています。残念ながら、保護者や教職員の方々にも、DVは児童虐待のひとつであるということをお話さなければならない時代になっているということが、非常に危惧され



ています。

### 市長

2年生と5年生に対するワークショップの内容は同じなのですか。

### 中島

内容は同じですが、使う単語や言葉使いは、学年に応じて変わります。

しかし、伝えたいことは「安心して・自信を持って・自由に生きる」です。そのためには、いやだと言ってもいいし、近づかない、逃げてもいいし、誰かに話す、相談することだよということは同じです。

### 江口

2年生と5年生に限定しているわけではなくて、低学年で1回、高学年で1回受けるということです。

### 中島

すべての小学校の全学年に入ることができればいいのですが、それは時間的にも予算的にも難しいです。いわゆる心が育つ時期というか、5、6年生になると前思春期になりますので、1、2年生の時とは全然違う感じ方になります。ですから、小さい時に1回、それからもう少し物心がついた時に1回受け、さらに中学3年生くらいでDV関係の話を聞くことができるというのが理想的です。今のところは理想的なかたちになっていると思っています。

### 鈴木

5年生、6年生の場合は、暴力の概念について話し合いをします。暴力というものがどういうことかがわかっていないと、自分が暴力を受けているのに、それが暴力だと感じていないかもしれません。それをわかってもらうために、5、6年生の場合にはワークショップの中で意見交換をする時間をとっています。

### 江口

殴る、蹴るという暴力は非常にわかりやすいですね。

ある高学年の子から、「いじめって暴力だって初めて知った」と言われたことがありました。

### 越智

自分をいじめることも暴力ですし、薬物も暴力なんだよって、意見交換をしてわかってもらいます。

### 中島

CAPというのは「Child Assault Prevention(チャイルド・アサルト・プリベンション)」の頭文字をとったものです。「Abuse(アビューズ)」という言葉があり、今は「Maltreatment(マルトリートメント)」と言い方が変わっていると思いますが、いわゆる間違った使い方、いわゆる虐待という意味なのですが、「Assault(アサルト)」は、

虐待に限定しておらず、バイオレンスを含むすべての暴力という意味です。暴力というものがどういうものなのかということがわかっていないと、自分のおかれている立場が不透明で、対処のしかたがわかりません。ですから、5、6年生には、心が痛くなるような、心が泣くような嫌なことを言われたりということも暴力のひとつなんだよ、それぞれ感じ方は違うけど、みんな顔が違うように、感じ方が違うのは当たり前なんだよ、でも自分が嫌だと思ふことは暴力なんだよって話します。そして、それが暴力なんだってわかると、それをどうやって防げばいいのか、対処法が学べるということです。

### 市長

子どもの虐待ということだけではなくて、人間力ですね。大人になっても同じですから。

### 中島

虐待の連鎖と言われていますが、どこかでそれを断ち切る手立てができるはずなんです。それは周りからの働きかけであったり、救いの手であったりするわけです。でもそれは、働きかけられている、救われていると本人が感じなければどうにもならないので、そここのところの考え方というか概念を小さいうちから身につけていくことが大事なのです。

### 市長

そういうものだということを意識の中に埋め込んでしまうということですね。

### 中島

そうです。私たちはある日突然日本語が話せたわけではなく、日本語を話す家庭で毎日育ってきたから、日本語が話せるわけです。ですから、小さいうちから「安心して・自信をもって・自由に生きる」というCAPの概念で育てられると、それは当たり前のことになるんです。日本語が話せるように、CAPの考え方が染みついて育つわけです。だから虐待を受けている子を見過ごせないし、暴力を受けている子の力になりたいと思う子になるのではないかと考えています。

### 市長

いじめられているのを見ても、見て見ぬふりをするとか聞きますね。

### 中島

今、すごくそれが多いですね。

### 越智

親が親でなかったりします。親になりきれしていないというか。

### 市長

それだと、当然、子どもにどう接していいかわからないですよ。たぶん、そういう親は自分の親からも同じくされているから、経験がないんですよ。

## 中島

やはり親の背中を見て育ちますからね。

## 江口

私は、もちろん家庭、保護者がその子どもの一番の味方であるとありがたいのですが、特別、親でなくてもいいと思います。学校の先生でもいいし、地域の人でもいいですし、習い事の先生やスポーツ団の監督でもいいですし、本当に誰でもいいんですよね。親がだめならもう終わりということではなく、誰か話を聞いてくれる人がいるということを知ってほしいと思います。

## 鈴木

子どもたちには、相談する人にはどんな人がいるか、具体的に言ってもらいますが、一番大切なことは、信じてくれる人が現れるまで話し続けることなんだよと私たちは強く言うんです。「誰もいない」って言う子もいますが、CAPの私たちでもいいんだよ、必ず誰かいるからねということを知っておいてねって言います。そうすると、アンケートに「これからは一人で悩まないで誰かに話すようにします」などと書いてくれるんですよね。そういうことでも、わかってくれただけでも本当に良かったと思います。

## 中島

これまで活動してきて、私たちは治療機関ではなくて、防止機関に所属していると思います。知ったからと言って何もできない、治療もできないし、その子が誰にも言わないでって言ったら、誰にも言えないんですよね。だけど、誰にも言わないでねって言う子どもに、誰にも言わないのは怖い事になると思うよ、誰かに話したらいいと思うよというように説得することから始まるのですが、そして、私が話すのではなくて、あなたが話せそうな人を一緒に探そう、もし私がついていった方がよければ、一緒についていくよという、いわゆる橋渡しのことしかできません。

今、学校の中で虐待やいじめなどがあった時に、まずはプロジェクトチームのようなものがあって、先生方が対処して下さるとは思いますが、その先生がどこにも相談できない状況では困るので、やはり学校の中でも一人にならないように、家庭でも地域でも誰でも、誰かに相談できるという体制をつくりたいと思います。

学校に事前に打ち合わせに行った時に、ワークショップをする予定のクラスの中に虐待を受けている子どもがいて、先生からその子がもし受けたくないって言ったら、受けない方がいいですかというご相談がある時があります。私たちは無理にとは言いませんが、その子が嫌だったら出て行ってもらってもいいですが、できれば最後まで受けてほしい、悲しくなるようなものではありません、その子が受けてよかったと思うようなものにしたいので、できれば受けてほしい、と言います。そして実際途中で出て行く子どもはいません。その子は自ら手を挙げて発言をし、自ら手を挙げて体験に出てきて、受けて良かったと言ってくれます。一番最後のトークタイムにもその子が来てくれて、「お父さんに殴られているんだ。でも僕、嫌だって言えるかもしれない」って言ってくれました。たった1回のワークショップで解決することはできないと思いますが、少しはその子の小さい引き出しの中に何か入れることが

できたかなと思います。CAPでも万能ではありません、限界がありますので、できないことはすごく多いと思いますが、しないよりはした方がいいだろうということで、これからも継続していきたいと思っています。

#### 市長

先ほど、防犯教室の中で一緒にするというお話も聞きましたが、防犯教室はどのような人たちが来て話しをするんですか。

#### 中島

警察の人が、不審者対策で、さす又の使い方を教えるなど、そういうのが防犯教室だと思います。

#### 江口

避難訓練の実施は小学校で義務付けられているものなのですか。

#### 教育指導課主幹

すべての学校で義務付けられています。

#### 江口

毎年、学校で避難訓練をやるのと同じような感じで、CAPをよんでいただけたらいいと思います。

#### 中島

人権の避難訓練ですって先生方にも言っています。

#### 市長

防犯教室とはだいぶ趣旨が違いますね。

#### 中島

そうですね。こうやって詳しくお話しをさせていただくと、防犯教室とは違うと理解していただけるのですが、まずはどんな分野でもいいので、よんでいただいて理解してもらいたいと思います。

すべての小中学校の児童・生徒が CAP のワークショップを受けることができるようになるために②

#### 中島

また、予算付けがされた場合、うちに来て下さいと手を挙げる学校がどのくらいあるかはわかりませんが、北海道新聞社会福祉振興基金をいただいたので、それを使って今年度末まで対応できますとお知らせしたところ、3つの学校から手を挙げていただきました。その中には初めての学校があり、これまで予算と時間がないと言っていた学校が手を挙げてくださり、なかなかできない教職員のワークショップも

入れてくださることになったことは、すごい進歩だと思っています。ですから、予算の部分を少しでも解決できれば、もう少しやっていたら小学校が増えると思います。

#### 市長

それはまた教育委員会と話してみようと思います。あとは学校で時間を確保できるかという課題がありますね。

#### 中島

先生方の中でCAPを知らない方はだいぶ少なくなっていると思いますが、よびたくてもよべないというのが今の状況だと思います。

#### 鈴木

教職員ワークショップを行ったところは少なく、子どもワークショップを見ただけで、わかった気持ちになっている先生もいるのですが、CAPプログラムの趣旨を大人の人に理解してもらって、初めて効果が出てくるものなので、教職員ワークショップがセットになっているのです。私たちも先生たちと力をあわせて子どもを何とかしようと思っているのですが、授業日数の確保などでどうしてもうまく折り合いがつきません。私たちも無理矢理入れてもらうのはすごく心苦しいので、何とか学校全体で受け入れるという体制ができて、先生たちも一緒になってCAPを勉強しようというようになっていただけるといいと思います。特に先生たちは子どもたちと毎日接している方たちですので、その先生たちに理解が深まるとすごくありがたいと思います。

#### 中島

受けた先生たちからアンケートをいただいているのですが、「クラス経営がうまくいくようになりました」と書いていただくこともあります。子どもが先生に話をしにきた時に、「それはどうなんだい？」というCAPの考え方で対処ができて、「早期に解決することができました」とアンケートに書いてくれる先生もいます。

#### 市長

一人一人が自らの力で解決できるようになることが多くなってきますね。

#### 中島

そうですね。また大人ワークショップは、子どもがいない方も受けることができます。地域のおじいちゃんやおばあちゃん、市役所の職員、民生児童委員の方など、深川では民生児童委員の方も受けています。

以前、深川市では、小学校ではなくて市民団体が「子どもを見守り隊」という組織をつくる時に、私たちをよんでいただきました。旭川市でも「子ども100番」など、そのような活動の一環でCAPをよんでいただいたこともあります。

#### 鈴木

子どもワークショップは大人ワークショップとセットでなければ受けられませんが、

大人ワークショップは単独でも受けられますので、そういう団体の中に入って行くことはできます。

**中島**

ぜひ、西川市長にも、体験していただきたいと思います。

**市長**

今度は学校で対話集会をしようと思っています。新年度から、準備できた学校から、順次行こうと思っています。一応4年間で全中学校を1回はまわるようにしたいなと思っていますが、子どもたちからどんな話が出てくるか楽しみにしています。

それと子ども条例を制定するつもりです。今いろいろと研究しているところです。

**中島**

子どもの権利条約というのもありますからね。それも市として批准していただくといいですね。

**市長**

そうですね。権利条約も参考にしながら、条例をつくっていかうと思っています。

**中島**

3月までは教職員ワークショップは入っていますが、子どもワークショップは4月以降になります。新入学生に受けさせたいという学校もありますので、1年生から始まってたくさん入ってくると思います。その場合には市長もぜひスケジュールを合わせていただいて、ぜひ体験をしていただけたらと思います。子どもたちもきっと喜ぶと思います。

**市長**

ぜひ、日程が決まりましたら教えてください。

## CAP あさひかわの会員を増やすことについて

**市長**

会員さんを増やしていくということも、たいへんでしょうね。

**中島**

ワークショップをするためには、いろいろな最低限の知識を学習しなくてはいけないので、規定の研修を受け、CAPスペシャリストというのですが、資格をとらなければなりません。研修は全国あちこちで行われています。市役所の関係部署の方も、ぜひスペシャリストの養成講座を受けていただいて、CAPあさひかわに入ってください、少しずつ広めていけたらいいと思います。先生方の中にも入りたいという方がいるのですが、普段お忙しいので、研修というかたちでやっていただけるのが一番いいのかなと思います。

### 市長

会員さんもいろいろなかたちで増やしていくことができれば、もっともっと広がっていきますね。

### 中島

もう少し人数を増やさないと、ワークを依頼されてもお断りしなければならなくなりますので、このCAPプログラムをすることのできる人を増やしていくことが、最重要課題ですね。

すべての小中学校の児童・生徒が CAP のワークショップを受けることができるようになるために③

### 鈴木

赤平市は、植松さんからお金などの面でサポートしていただいているので、市内すべての学校に入れているのですが、でもこれからもずっとこのかたちでやっていけるわけではないので、それぞれの学校で予算をつけるようになってくれることを願っています。市や教育委員会などで、そういうサポートをしていただける体制ができればいいなと思っています。やはり旭川市のような大きなまちでそういう前例ができてくれると、ほかのまちにも広がっていくのではないのでしょうか。

### 中島

ワークショップ後のアンケートに、先生から「初めて知りました。とてもいいですね。ぜひ広げてください」といった意見をたくさんいただきます。ほかに「クラスの子どもたちから相談事が多くなりました」などもあります。

また、そのアンケートに、気になることを書いてくるような子が時々います。

### 山越

トークタイムなどで気になるようなことがあったら、子どもに了承を得た上で、担任の先生にこういう話も出ましたよとお伝えしています。

### 中島

すでに承知している先生もいらっしゃいますし、薄々気付いていたり、初めて聞いて、気を付けてみますというふうにおっしゃる先生もいます。

### 市長

子どものアンケートに「人に権利があったんだと思いました」と書いてありますね。

### 中島

「権利があるということを初めて知りました」とかありますね。



## 江口

権利というのは、生きていてもいいんだよってことです。ご飯食べてもいいんだよ、トイレ行ってもいいんだよ、息してもいいんだよ、寝てもいいんだよというところから始まって、安心・自信・自由の権利があるというふうに持っていくものなのです。

## 市長

こういうアンケートを見ると、子どもたちは、私たち大人が思いもしないようなことで悩んでいるんだなって思いますね。

## 山越

ある女の子は、「私には力があるってということがわかりました」って言ってくれました。

## 鈴木

このアンケート結果というものは、私たち自身の力にもなりますね。私たちの言いたいことが伝わって良かったと思います。

## 山越

赤平の植松さんが、「赤平市は今、財政的にはかなり厳しい状況ですが、その中で将来を担っていくのは子どもたちです。この子どもたちに輝きを与えなかったら、赤平の将来はありませんので、今、自分はこの子どもたちを育てたい」とお話ししています。それは旭川市の私たちも同じですよ。

## 市長

本当に同じだと思いますね。

## 市長終わりのあいさつ

今日は長時間にわたり、貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございます。私もたいへん勉強になりました。子どもたちの未来を、行政も教育委員会もどうサポートできるかということは、たいへん重要なことだと思っています。今日いただいたお話をぜひ参考にさせていただいて、私も頑張っていきますので、引き続きまたいろいろとお力添えをいただきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。